

「漢学」に異議あり！——コメント——

「漢学に異議がある」と言ったところで、もともとこの呼称は、幕末から明治前期にかけて、儒教をある程度肯定的に考えていた人々が自分たちの学問・思想に付与される「新しさ」をこう呼んだところからきているのだから、いまさら何を言ってもはじまらない気がする。しかし、かなり短い期間に、いままでの儒教とは違う新しいものという気負いを含んだ呼称が、近代にはふさわしくない古くさい学問・思想の代表という位置にまで急落するのであるから、それがなにゆえか、そこにはどんな落とし穴があったのかについて確認しておくことは悪いことではないだろう。

さいわいにも大会運営委員のご努力により、吉田公平

澤井 啓一

さんと齋藤希史さんという、この分野を代表する新旧（？）二人の発表者が迎えられ、「漢学」の栄枯盛衰について話を聞く機会が与えられることになった（ついでに言えば、コメントイターも新旧のコンビとして釣り合いをとったらしい）。吉田さんからは、「漢学」の前者の側面、つまり「漢学」が新しい学問・思想として広がってゆく経緯を聞くことができたし、齋藤さんからは、「漢学」のもう一つの側面、つまり「漢学」が古くさい学問・思想として定着するに至った理由を聞くことができた。時系列で考えれば、吉田さんの話からコメントすべきであるかもしれないが、一般的な「漢学」のイメージは齋藤さんが紹介されたことがらに基づいて広まっているように思

られるので、そこから最初に触れてゆきたい。

齋藤さんは、京大シナ学の泰斗青木正児について発表されたが、そのなかで吉川幸次郎の「青木正児博士業績大要」（『東方学』第三十一輯）を紹介している。吉川は、中国文学そのものの歴史は非常に古いが、「その歴史の様相またその美の法則を体系的に叙述し究明する事業」は西洋から方法論を受け入れて始まったばかりであり、その代表者が青木正児だと述べている。そのうえで、「博士（青木正児のこと——引用者注）のきらうものは、従来の漢学者風の非実証的な見解、非論理的な表現であった。もつとも憎むものは、道学と、道学的文学観であった」と断言する。ここでは「漢学」と「道学」という、本来は異なるものが一緒くたにされたうえで、古くさいもの、学問的ではないものとして語られている。こうした吉川の青木正児に対する評価こそ、「漢学」が古くさい学問・思想とされるとき、典型的なナラティブなのである。

というのも、もともと「漢学」は道学（宋学）と対峙するなかで成立してきたからである。もちろんこれは吉田さんが説明しているように中国のことであり、日本のことではない。しかし宋学（道学）の教条的な価値基準に対して、漢・唐の注釈を参考にしながら実証的で新し

い経典解釈を確立しようとしたのが中国の「漢学」であり、その影響は江戸後期の折衷学や考証学にも及んでいて、そこから日本の「漢学」も成立してきていた。その意味で日本の「漢学」は、論理的であったかはともかくとして、実証性を重視していたことは確かである。中国の「漢学」と日本の「漢学」との関係についてはまだまだ研究されていないところも多く、それこそ実証的に研究すべき対象として残されているが、解釈学的知識を商品化し流通させることによって発展してきた江戸後期の「都市の儒教」とも言うべき折衷学や考証学、すなわち狭義の日本の「漢学」は、青木正児にかぎらず京大シナ学そのものと深く関わっている。

青木正児の晩年の業績として知られている「中華名物考」をはじめとする一連の考証は、食物や器物の変遷を「名」と「物」の対応関係から実証的に追求したものである。青木自身は「前人未発の試み」と豪語していたにもかかわらず、吉川幸次郎は「余事」として紹介している。吉川がそのように語る理由は、おそらく、それが「好事」、すなわち趣味的なものを受け取られるからというよりも、考証学の正統とも言える「訓詁学」の系譜につらなることを隠したかったからに違いない。食物や酒・茶に関して歴史のかつ体系的に考証することは、た

しかに「前人未発の試み」であったかもしれないが、「名」と「物」の対応関係をさまざまな文献を通じて明らかにすることは、宋学（道学）の教条的な解釈を打破するための、「漢学」における重要な方法的戦略だった。このように考えると、あきらかに吉川は、こうした「漢学」から青木正児、あるいは自分自身を含む京大シナ学へと至る系譜を隠蔽していると言えよう。

一方、吉川幸次郎が強調している西洋の学術の影響という点はどうだろうか。明治期の学術全般において、西洋の方法論や問題視角、術語などを取り入れようとする、いわゆる（近代化）が進められたのであるから、中国文学の研究もまた影響がないはずはない。解釈学的分析を歴史的に実証的にすすめようとする方法論、あるいは「美意識」という問題視角の導入がそれを物語っている。しかし京大シナ学の語源とも言える、フランスのシノロジとの関係については、詳しく検証する必要があるにしても、それほど顕著とは思えない。もし影響があるとしたら、戯曲や書画の研究において、文化人類学の先駆とも言えるような哲学的で宗教社会的な分析がもつと見られてもよいという気がする。むしろ「雅」のみならず「俗」の領域にも関心を寄せた、江戸後期の都会的な文人趣味への共鳴という面が強いのではないだろうか。

そのことが、吉川が危惧したように、食物や器物の変遷を「名」と「物」の対応関係から実証的に追求した研究が「好事」という印象を避けがたくしている要因なのであろう。

ただ青木正児が道学および道学的文学観を毛嫌いしたというのには確かであろう。もつとも、この場合の道学とは、中国における宋学のことではなく、その影響をたぶんに受けているには違いないのだが、道徳的修養論や経世済民的な政治論を声高に主張するような日本のもう一つの儒教を指していたと思われる。この種の儒教も、江戸後期から明治にかけて広がりを見せていて、さきに挙げた折衷学や考証学がたぶんに文人趣味を匂わせていただけでなく知識を商品化したがゆえに「町人の儒学」と呼ばれたのに対して、「武士の儒学」と称されている。実際には武士階層に限定されたわけではないだろうが、幕府や藩の改革に際してこの種の儒教が利用されたのは事実である。徂徠学の流行や寛政異学の禁を契機とする朱子学の見直しなどが行なわれた結果、日本社会に適合するように土着化された儒教であったにしても、幕末の武士たちの一部に自分たちが儒教を実践しているという意識が広がっていたこともたしかである。

だが、明治になるとこの種の儒教は「衰退」へと向か

う。近代化の結果、儒教が「衰退」するというのはいままでの一般的な理解であり、今回の吉田さんの発表によれば、むしろ実態は「拡散」と表現した方がよいと思われる。「町人の儒学」の系譜が「東洋学」を扱うアカデミズム全般へとひろく発展してゆくのに対して、「武士の儒学」の方は、アカデミズムにおいてせいぜい修身や漢文教育といった領域しか占められなかったがゆえに、いままでは「衰退」と理解されてきたのだが、アカデミズムはともかく在野における言論・文学の活動は盛んだったわけだから、「拡散」という表現の方が適切である。ただ全国の図書館などに所蔵された漢詩文集の調査ばかりでなく、それを支えた塾や結社などの活動についてもまだまだ不明なところが多いというのが吉田さんの話であるから、「拡散」の全体像を知るには今後の研究を待つしかない。

この「拡散」という事態がなぜ起きたのかということについて、吉田さんは禁欲的に語っていないが、私が推測するかぎり、廃藩置県による藩校の廃止や秩禄処分といった明治政府の政策が関わっているよう。つまり、藩校の教授を務めていた人々ばかりでなく、ひろく儒教的な教養を持っていた武士身分の人々が、生活の糧を得るために私的に塾などを開いて漢詩文などを教えるように

なったのである。そしてこれらの活動は、明治中期に教育システムが整備されるまで初等教育を補完するものとして機能したばかりでなく、地方の文化を支えるものともなっていたのである。都会的な文人趣味が地方にも拡大したという悠長な事態ではなく、生きる必要に迫られての選択であったのかもしれないが、明治になって「武士の儒学」もまた商品化されるようになったと言えよう。しかしこれによって「武士の儒学」と「町人の儒学」との境界は曖昧になった。一見したところ趣味的な文学活動のようであるが、儒教の有用性を完全に放棄したわけでもなく、いったいどこに向かおうとしているかよく分らない、これこそが一般に用いられている広義の意味での「漢学」であった。

広義の「漢学」には、もう一つ、近世日本儒教の「変質」と呼ぶような事態を加えるべきだろう。それは「武士の儒学」とアカデミズムとの関わりで起きたことであるが、哲学・倫理学、さらには社会学や法学など、西洋の学問の導入に儒教的知識が積極的に利用されたという事実である。詳しいことを述べるゆとりはないが、井上哲次郎・建部遯吾・穂積八束といった人々の活動を見ると、たんに儒教的素養によって西洋の学問を理解したというよりも、もつと積極的に西洋の学問と儒教との統合

を図ろうとする意志を認めることができる。視座を儒教において考えれば、この事態は、青木正児に代表されるような「東洋学」への脱皮という〈近代化〉とは異なる、日本儒学のもう一つの〈近代化〉であった。しかし残念なことに、現在こうした活動は、西洋の学問の受容史ばかりでなく、「漢学」に関するナラティブにおいても排除されている。ここで、とりあえず「変質」と呼ぶのはそのゆえである。

以上に述べてきたことから、なぜ私が「漢学」という呼称に異議を唱えるか、おおよそのことは理解されたと思う。幕末以降、日本儒教はさまざまところで〈近代化〉を図ってきた。しかし近世後期において多様性を見せていた日本儒教は、それぞれの系譜によって〈近代化〉のあり方が異なっていた。もちろん成功したのもあれば、失敗したものもある。その全体像を理解するとは、日本思想史における〈近代化〉を再検討するうえで有益であるにちがいない。ところが、こうした活動を十把一絡げに価値のないものとして捨て去るときに使用されたのが「漢学」という呼称であった。それは勝者によって敗者を切り捨てたための、あるいは失敗した事例を自分たちには関わりのないものとし、自己のみを特権化するための言辞でしかない。いまなお不明なままに放

置されてきた近代における儒教の全貌を理解するために、「漢学」という呼称を止め、単純ではあるが「近代日本儒学」と呼ぶべきなのである。

(恵泉女学園大学教授)